

資料

発達障がいのある子どもと家族の避難生活上の困難さや 必要な支援について ～熊本地震における影響～

長澤久美子¹⁾・高野美雪²⁾

Evacuation life difficulties and necessary for developmentally
disabled children and their families
— Influences of the 2016 Kumamoto Earthquake —

Kumiko NAGASAWA・Miyuki TAKANO

自閉症スペクトラム障がいなど発達障がいのある子どもたちは、こだわりや常同行動など特性から周囲の理解が得られにくく、熊本地震でも避難所利用の難しさから車中泊や困難な避難生活を過ごした家族の姿もあった。そこで、本研究では、発達障がい児を育てている母親を対象に、避難生活の困難さや必要な支援の実態について、聞き取りと記述式調査を行った。さらに障がいのある子どもを持つ母親の疲労感に加え、PTG (Post-traumatic Growth) の観点から分析した。その結果、地震が子どもたちの心へ与えた影響と、その不安に寄り添い続けた母親自身にも同様にストレスがかかり、それが親のきつさ・疲労度にも反映されていた。また、我が子の障がいを受け入れ、乗り越え、子どもと共に生きている母親たちだからこそ、今回の震災という新たな逆境的体験の中でも、何か子どもと一緒にできることはないかと状況を前向きにとらえ、母親自身の心理的苦痛を和らげることが出来、PTGと捉えられるポジティブな子どもの側面をより感じられたことが明らかになった。

キーワード：熊本地震、自閉症スペクトラム障がい (Autism Spectrum Disorder)、避難生活、親のきつさ、PTG (Post-traumatic Growth)

問題と目的

2016年4月に起きた熊本地震は、4月14日のマグニチュード6.5、4月16日のマグニチュード7.3と2度にわたる震度7を記録した大震災であった。染矢(2012)は自然災害、特に大規模な地震により引き起こされる精神ストレスは地震直後にとどまらず、一部の被災者においては被災後数年にわたり持続するとした。特に子どもたちへの影響については、清水(1998)は阪神・淡路大震災後の調査で被災者の心のケア対策について、子どもたちが地震の恐怖をどのように受けとめ心にとどめているかということは見えにくいとし、内山

(2015)も子どもへのメンタルヘルス支援は時間軸を意識し、長期スパンの中で考える事が必要と提唱した。さらに、障がいのある子どもたちの震災時の反応はさまざまであり、中でも特に知的障害を伴う自閉症スペクトラム障がい (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) 児は被災状況の理解不足から不安が昂じ、異常行動の悪化を招くとした。また、阪神・淡路大震災より2年8か月後の調査では、家族の生活の変化について保護者のQOLが、平均値より低かったことも明らかにした。大規模自然災害が自閉症のある人々やその家族に及ぼす長期的影響に関して、現在のところほとんど明らかにされていない(内山, 2015)。1年が経過し、熊本地震では、各方面からの様々な支援や徐々に改善される避難生活が、その復旧・復興への立ち直りの過程としてメディアに取

¹⁾九州ルーテル学院中学校

²⁾九州ルーテル学院大学 人文学部心理臨床学科
Email: takano@klc.ac.jp

り上げられ、事態が収束へ向かいつつある様子を報じている。熊本地震においても被災したASD児といった発達障がい児やその家族の避難生活についての全容や個々のレベルでの子どもたちに対する影響などを明らかにしていく必要がある。

近年、震災後の影響について検討するにあたり、逆境体験の中から前向きに人としての成長する点にも注目されてきている（近藤，2011）。この成長は、PTG（Post Traumatic Growth）と呼ばれ、トラウマ的な体験をきっかけとして生じる肯定的な変化とされている（八田ら，2015）。また、PTGの成長には「自己認識の変化：人間としての強さと新たな可能性」「他者との関係における変化」「全般的な人生観の変化：優先順位、感謝、そしてスピリチュアリティ」の3領域があり、さらにPTGの中核となる①人間としての強さ②新たな可能性③他者との関係④人生に対する感謝⑤精神的（スピリチュアルな）変容、の5因子が挙げられている（Tedeschi & Calhoun, 1996）。近藤（2011）は、PTGの側面から子どもを支援していくことが、大人に求められているとしている。

そこで、本研究では、発達障がい児を育てている母親を対象に、避難生活上の困難さや必要とした支援等に個々に違いがあるかどうか、本当に必要な物は何か、各家庭の非常袋等の備えや実際に役立った物等についても調査を行い、避難生活の困難さや必要な支援の実態、および母親の健康に関する客観的指標として身体的および精神的健康評価となる疲労感、PTG（Post Traumatic Growth）について検討する。

対象と方法

(1) 対象

調査は熊本県内の通所施設、支援学校、支援学級に通う子どもたちを育てている母親6名（年齢30～50歳代）に協力を依頼した。子どもは、14名（5～20歳）で内訳は自閉症など発達障がい児・者が10名、兄弟児は4名であり、そのうち4名が（男児2名の兄弟で2組）同胞障がいであった。また男女比は、男児12名、女児2名で男児が多かった。所属先は、兄弟児4名は通常学級在籍で、障がいのある10名は通級学級や支援学級在籍、（支援学校が7名、通常学級在籍が1名、就労継

続支援B型への通所者1名、保育園児1名）であった。

(2) 調査内容

設問項目は①「夏休み中の過ごし方や休み明けの子ども様子について」②「休校中の過ごし方や子ども様子について」③「良かったこと、成長を感じた事」④「我が家オリジナルの非常袋について」⑤「その他」の5項目の設問形式でインタビューを実施した。母親の疲労度はチャルダの疲労スケール（Chalder, 1993）を用い測定を行った。

(3) 分析方法

インタビュー内容の対象者個人別の逐語録を作成した。その内容別に集計した中から5設問のうち、最も回答数の多い項目に着目しKJ法で分析を行い、回答をカード化、内容別にグルーピングして表札（タイトル）を付けた。カテゴリ化した各グループの関連性と論理的関係を空間配置図で示し文章化し分析を行った。グルーピングは大学教員1名、大学院生3名、著者1名の5名で行い、実態の把握を行った。また併せて母親の疲労結果の分析、全5項目の質問項目からPTGについて分析を行った。

(4) 倫理的配慮

インタビュー内容の録音にも同意を得て行い、インタビュー中のメモ等も必要最小限にとどめ、対象者が心理的負担等を感じる事の無いよう努めた。また調査協力者に対し、調査の趣旨について文書と口頭で説明を行い、調査への参加の意思が明らかなことを確認した上で、調査の途中であっても調査の中断が可能であること、調査で知り得た個人情報は厳重な保護のもと保管し使用する旨を伝え行った。

結果

カテゴリー分類およびその特徴

インタビューから、母親の回答は136ラベルとなった。最も多かったのは質問②「休校中の過ごし方や子ども様子について」であった（55ラベル、41%）（図1）。最も、この休校中の時期に、障がいのある子どもたちとその家族が震災の影響を受け、様々な困難の中で過ごしていたかが表れている。そこで、この質問②「休校中の過ごし方

や子どもの様子について」に着目し、KJ法での分析を行った。KJ法のグルーピングの過程では、各ラベルの記述内容を確認しながら、親近性のあるもの同士を集めカードを選別し、グループの編成作業を行った（図2）。その結果10グループ、17サブカテゴリに大別され、それぞれに内容毎の表札（タイトル）をつけた（表1）。

以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを < >, ラベルの記述内容を「 」, で記す。

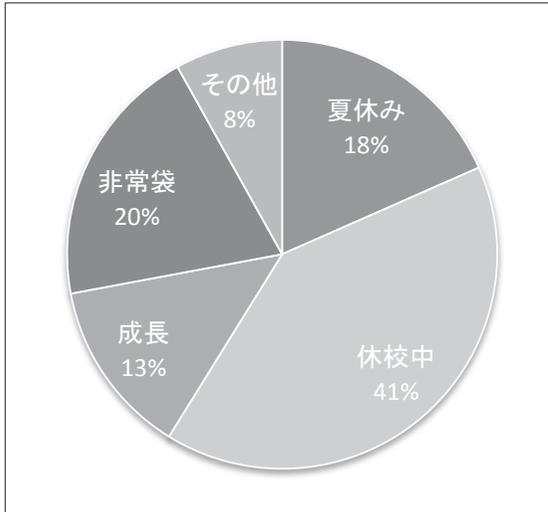


図1. インタビューの項目別内訳

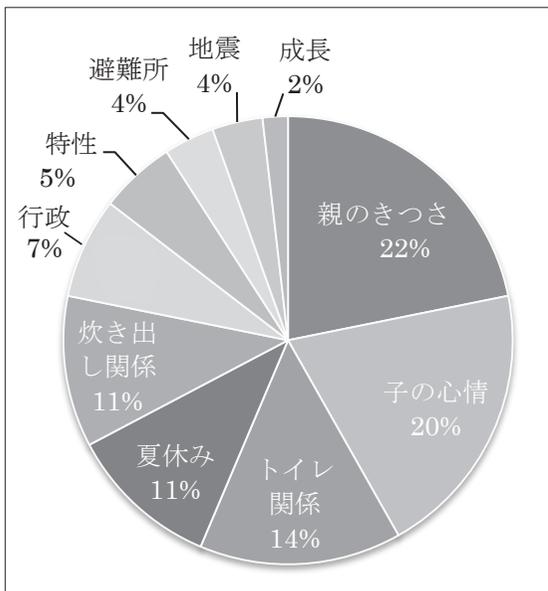


図2. 休校中の過ごし方におけるKJ法によるグルーピング結果内訳

カテゴリ数順に【親がきつさを感じた時】（12カテゴリ、22%）、【子どもの心情】（11カテゴリ、20%）、【トイレ関係】（8カテゴリ、14%）であった。震災後、子どもたちに頭痛や吐き気、夜尿等、地震の恐怖からくる身体症状が見られ、子どもたちの心への影響の大きさがうかがえるが、その不安を受け止め続けた親自身にも同様にストレスがかかり、それが親のきつさ・疲労度にも反映されている。しかしそのようなつらい状況の中であっても、子どもの成長を感じ喜ぶ親の姿もあった。

【親がきつさを感じた時】（22%）集計から、休校期間中に母親が障がいのある子どもを見ながら、震災の片づけや義父母の世話など多忙を極めた姿が見えてきた。そこで「親のきつさ」についてカテゴリ別の内容分析を行った。特に、<休む時間なし>は全体の中で<怖がって（トイレに）いけない>と並び、最もラベル数が多く（11%）、母親の自分自身についての記述が目立ってみられた。これは震災後、地震の揺れによる家の片づけや食料の調達に加え、家族や義父母の身の回りの世話と多忙な母親に対し、子どもたちも地震の影響で不安定だったため、記述からも、母親は休む時間も思うように持てず、自分の為の時間の確保が難しかった様子がわかる。「実家の母も体が悪く病院に連れて行くなど、自分一人だけで何もかもしなければならぬ。本当に疲れた。」「余震でちょっとでも揺れると「おかーさん」と、子どもが不安がり呼ぶ為、一人になる時間が全然なかった。24時間毎日ずっときつかった。」

【子どもの心情】（20%）では<不安・恐怖>のラベルが最も多かった。今回の熊本地震は前震・本震共に夜間に起きており、また予測のつかない余震が2千回を超え数多く続いた。その為、暗くなることや一人になる事を不安がる記述がみられた。前震本震後も身体に感じる程度のゆれが続く、余震が発生し、昼夜問わず子どもたちは予測のできない出来事に不安を感じ続けた。その為、親の姿を確認できない時に子どもが不安がる様子が記述にも多くあった。<同行できない不安>「親の姿がみえないと不安がり、それが夏休みの間も続いた。」以下に述べるトイレの記述とも重複するが、親と一日中、行動を共にしていないと不安で

表1. 「休校中の過ごし方」における KJ 法によるカテゴリ分類 (計55ラベル)

カテゴリ	サブカテゴリ	回答例
親がきつさを感じた時 (12)	休む時間なし (6) (自分の時間確保)	実家の母も体が悪く病院に連れて行くなど、自分一人だけで何もかもしなければならぬ。本当に疲れた。
	震災による生活面の影響 (4) (片付けに時間がとられる)	日が経てばたつ程、片付けは進まないのに疲ればかりが残る。
	子への対応 (2)	休校が終わり、学校が始まっても避難先から登校した。通学路もガレキがそのまま、子どもが安全に歩ける状態では無い為、車での送迎を続けた。
子どもの心情 (11)	不安・恐怖 (5)	二度の大きな地震が夜間におきた為、暗くなると不安が増す様だった。夜になるとまた地震がくると言い怖がった。
	身体症状 (5)	震災からずっと、子どもの夜尿が止まらない。ずっと続いている。よほど、地震がショックだったんだと思う。
	同行できない不安 (1)	親の姿がみえないと不安がり、それが夏休みの間も続いた。
トイレ (8)	怖がっていけない (6)	弟(末っ子)は赤ちゃんがえりだった。トイレも一人で行けない。今(震災半年後)は少し良くなったが、まだ行けない。
	親のつらさ (2)	ずっと子どもがトイレに行く際に「ついてきて」「どこもいかに」ばかり言う。何もできない。
夏休み (6)	イベント・夏休みの過ごし方 (4)	掃除、洗濯の手伝い、犬の散歩等、自分にできる事や生活上で必要な事は何か一緒に考えてした。
	生活リズム (2)	手伝いをさせる反面、しっかり好きなゲームで遊ばせるようにした。あまりに日常とすべてが違うのは、かけ離れすぎて良くないと考えた為、DSがあることでバランスを保ってたと思う。
炊き出し関係 (6)	イベント参加の難しさ (4)	芸能人も沢山来てくれたが、自分たち(指定避難所以外に避難している人)は全く知らず会えなかった。
	配給方法 (2)	救援物資は避難所生活を送る人の為の物、という雰囲気があった。自分たちは住めるところがあるのに、家が全壊して、何もかも無くしてしまった人への物まで、横からもらえないと感じた。
行政 (4)	支援の受け方・活用の難しさ (4)	実家に避難しているため、避難所に物資だけもらいに行くのは行きづらかった。 子どもを遊びのボランティアさんの活動日・時間に連れていくな、その間は親は片付けとか買い出しとか何もできない。誰か手伝ってほしくて、避難所にいないと誰にも頼めない。
特性 (3)	日常生活を続行したい気持ち 震災に対する理解困難 (3)	周りの状況や地震の意味を理解するのが難しい為、本人はいつも通りの生活を送ろうとする。
避難所 (2)	避難所利用の難しさ (2)	近所の人達とスーパーの駐車場で夜明けを待ったが、子どもが落ち着かず帰りたがり自宅に戻った。
地震 (2)	休校中に感じた地震のイメージ (2)	だんだん震災から日にちが経ち、そろそろ落ち着いたかと思われるかもしれないが、全くそうではないと思う。
成長 (1)	子の成長 (1)	自宅避難の間は水がでなかった為、お風呂に入る為にバケツリレーをした。キッチンで湯を沸かし湯船まで運び、それでお風呂に入った。いつもやらない事も沢山頑張っていた。

() 内はラベル数

たまらない様子だったことがわかる。それらの不安は＜身体症状＞のラベルにも表れている。

また、その不安を受け止め続けた親にも同様にストレスがかかり、この【子どもの心情】のカテゴリーは【親がきつさを感じたとき】と重複している。ラベルにも以下のような記述が目立つ。「避難するつもりが知らない人に囲まれて過ごすのを子どもが不安がり、落ち着かず家に戻った。二度の大きな地震が夜間におきた為、暗くなると不安が増す様だった。夜になるとまた地震がくると言い怖がった。」「震災からずっと、子どもの夜尿が止まらない。ずっと続いている。よほど地震がショックだったんだと思う。」震災による生活の変化に戸惑う子どもたちに寄り添う母親の姿がうかがえる。

【トイレ関係】（8カテゴリー、14%）では、母親の記述から、休校中の子どもたちの様子について、年齢問わずトイレに行き渋る姿や、赤ちゃん返り・夜尿など排泄についての難しさ等、＜恐がって（トイレに）いけない＞のトイレの問題が多くあげられた。今回の震災で、子どもたちに頭痛や吐き気等の地震の恐怖からくる症状がみられた事が母親の記述から分かるが、その他の身体症状としては排尿に関する内容が非常に多かった。また夜尿に関しては、震災以前には症状が無く、本震発生直後から夜尿が始まっている事から、今回の震災が子どもの心に影響を及ぼし、またそのストレスが自律神経の不安定さを招き夜尿へとつながった事が考えられる。いかに子どもたちにとり、地震によるストレスが大きなものであったかがうかがえる。丁寧に各ラベルを見てみると、タイミングが合わずに排尿や排便の失敗をしているよりは、トイレに行くことで母親と離れ一人になってしまう事や、一人で個室（トイレ）にいる時にまた揺れるのではないか、＜怖がって行けない＞といった不安の強さ、＜休校中に感じた地震のイメージ＞への恐怖心がうかがえた。「弟（末っ子）は赤ちゃんがえりだった。トイレも一人で行けない。今（震災半年後）は少し良くなったが、まだ行けない。」「私（母親の姿）がちょっとでも見えないと『おかーさん、おかーさん』と探して、トイレにも一人でいけなくなった。不安なんだな、と思った。」また、このカテゴリーで

は排泄の難しさと、それに昼夜問わず対応しなければならない母親のつらさも＜親のつらさ＞の記述として目立ち【親がきつさを感じたとき】と重複している。特に、まだ余震で揺れる家の中に入り、家財が散乱する中で子どもの下着の替えや洋服を探すだけでも困難な上に、電気は復旧していても断水で洗濯機が使えず、幾度となく手洗いで夜尿で漏れた毛布や衣類の洗濯は母親には負担であった。また、食料品はコンビニエンスストア等で震災直後から営業した店舗もあったのに対し、衣料品店は大型商業施設や全国チェーン店など震災から再開を待たされ、配給物資の品目にも衣類は無かった為、非常袋には子どもの下着の替えを入れて備えているという記述もあった。

母親の健康に関する客観的指標としての疲労感の特徴

また母親の疲労度では、疲労度が高い母親（疲労度高群）と低い母親（疲労度低群）との間には総合的疲労の得点で最大25点もの差がみられ、同じように震災を経験した母親同士でも大きな差があり、避難場所や物資の確保等、被災時の状況に影響を受ける傾向がみられた（表2）。

表2. 母親（N=6）の疲労評価結果

母親の疲労感						
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
身体的疲労	21	11	9	17	10	21
精神的疲労	16	10	3	12	7	13
総合的疲労	37	21	12	29	17	34

PTG についての分析

しかしそのようなつらい状況の中であっても、子どもの成長を感じ喜ぶ親の姿もあった。これは親自身のPTGだと考えられる。休校中において【PTG】の記述が1ラベル、また記述全体では18ラベルもあり、これは全体の13%を占めている。またラベルには、「避難を機に、子どもが自分から習い事のことなど『弟だけでなく自分もやりたい』と言うようになった。今まで障がいのある弟が何かと優先で、お姉ちゃんが我慢する事もあったと思う。自分の気持ちをだせるようになってきたのは成長だと感じた。」といった内容が

あった。休校中という震災時の混乱した時期にもかかわらず、子どもの言動の変化に気づき、それを喜び、成長ととらえるポジティブな母親の思いがあらわれている。

考 察

震災は子どもたちに不安と予想外の生活や行動パターンの変更をもたらし、それは震災時の避難生活における場所・空間・物資・対人などの制限やストレスによる様々な問題行動や、新たなこだわり等の出現を引き起こした結果、避難所利用や物資の配給等の困難を余儀なくされる事態をも招いた。

休校中におけるグループ別分析について【親がきつさを感じた時】(図3)

カテゴリー別にみるとラベル数が最も多かったのは【親がきつさを感じた時】であり(12ラベル)全体の22パーセントを占めている。また、この項目はラベル数が多いだけでなく【子どもの心情】【トイレ関係】【炊き出し関係】【避難所での出来事】【特性】と5つものカテゴリーと重複した内容だった。記述からみてみると、「ずっと子ども3人と一緒に一日中家にいて、どこも連れていくところも開いてない為きつかった」「自分たち(の家)だけならまだ何とかなるが、実家(夫側)の片づけも大変。義父母は体育館(益城)に避難している為、片付けに行ったり、入浴できない為に温泉に連れて行くなどして大変だった」など、休校期間中に母親が障がいのある子どもをみながら、震災の片づけや義父母の世話など多忙を極めた記述が多くみられた。これら前述の内容からも、休校中の母親自身の姿が見えてくる。

また重複するカテゴリーとの重なりからもみると【子どもの心情】では、「休校の間、実家に避難した。余震が続き、子どもたちが怖がって家に入りたがらない為車中泊をした」や「学校についても車から降りたくないと言い泣いて吐いてしまった。それくらい不安を感じているのだと思った。」のように、復興に向け賑やかにイベントが行われる一方で、まだまだ地震の不安の中に子どもたちがいたことがわかる。また【トイレ関係】でも、不安(地震の)から頻尿になって、始終ト

イレに行かないと落ち着かないようになった。一日中トイレに付き合うのは、つらかった。」と、親のつらさが表れている。また、同様に関連性のある【避難所での出来事】では「近所の人達とスーパーの駐車場で夜明けを待ったが、子どもが落ち着かず帰りたがり自宅に戻った。」と、親の思いとは異なって避難の上手くいかなさが記述に表れており、地震での恐怖や不安以外にも、上手く支援を受ける事ができずに孤独・孤立感を感じた母親もいた事がわかる。障がいのある子どもの、慣れない環境や沢山の人の中に入りたがらない、常同行動があり落ち着かない等の【特性】により避難所の利用をためらった実情や、避難しても知らない人の中で上手く過ごせずに自宅に戻らざるをえず、その為に物資だけでなく情報も手に入らず、家族でさびしい思いをしていた避難の実態がうかがえる。このような記述内容から、障がいのある子どもがいる家庭の「休校中」がどのような毎日であったのか、その一部が明らかになったと考えられる。

しかし、このような状況に対し支援が無かったわけではない。熊本県内では震災直後から地域の学校や公園が指定避難所となり避難生活や復旧・復興の拠点として、避難者受け入れや様々な救済物資の配給と炊き出しが行われた。そこでは様々なイベントや遊びのボランティア活動が行われた。熊本市は震災直後から障がい児・者が利用可能福祉避難所を開設し、テレビ画面には福祉避難所の告知テロップが流されていた。障がいのある子どもの家庭には福祉関係者による訪問が行われ、子どもや家族の安否確認活動がなされたとの記述も「休校中の過ごし方」以外の質問の記述ラベルにあった。このような様々な支援策があったにも関わらずなぜ母親の疲れに関する記述「親がきつさを感じた時」が目立つ結果となったのか。それは母親の行政への切実な思いがつつられている次の記述に表れている。「手帳(療育手帳・精神手帳)を見せれば係の人が理解して、配慮してもらえ様な共通理解があれば良いなと思った。携帯の画面とか、何かスタッフ(炊き出しとか医療とかのボランティア)の人に見せれば、それだけでわかってもらえるような、そんな仕組みができればいいのと思う。自分と同じように困った話(炊

き出しに子どもが並べない)を後から聞いた。障がいや病気など、その場に並べない何か事情のある子どもを持つ親は、きっと同じように困ったと思う」。それには、炊き出しで子どもが並べずに困ったことを例に挙げ、発達障がいに対する社会での理解が進むようにと願う母親の切実な思いが込められた記述であった。そしてそれこそが、支援物資やイベント参加などよりも、もっと本当に障がいのある子どもたちとその家族(母親)にとって本当に必要な支援だと筆者は考える。

個人別分析に関する考察

チャルダの疲労スケールの結果では、最も疲労度が高い母親(No.1, 4, 6を疲労度高群とする)と低い母親(No.2, 3, 5を疲労度低群とする)との間には総合的疲労の得点で最大25点もの差がみられ、同じように震災を経験した母親同士でも大きな差があることがわかる。これは母親が震災時にどこで誰と過ごしていたか、その被災時の状況に影響を受ける傾向がみられた。全体の記述でみてみると、疲労度高群の母親は余震の続く

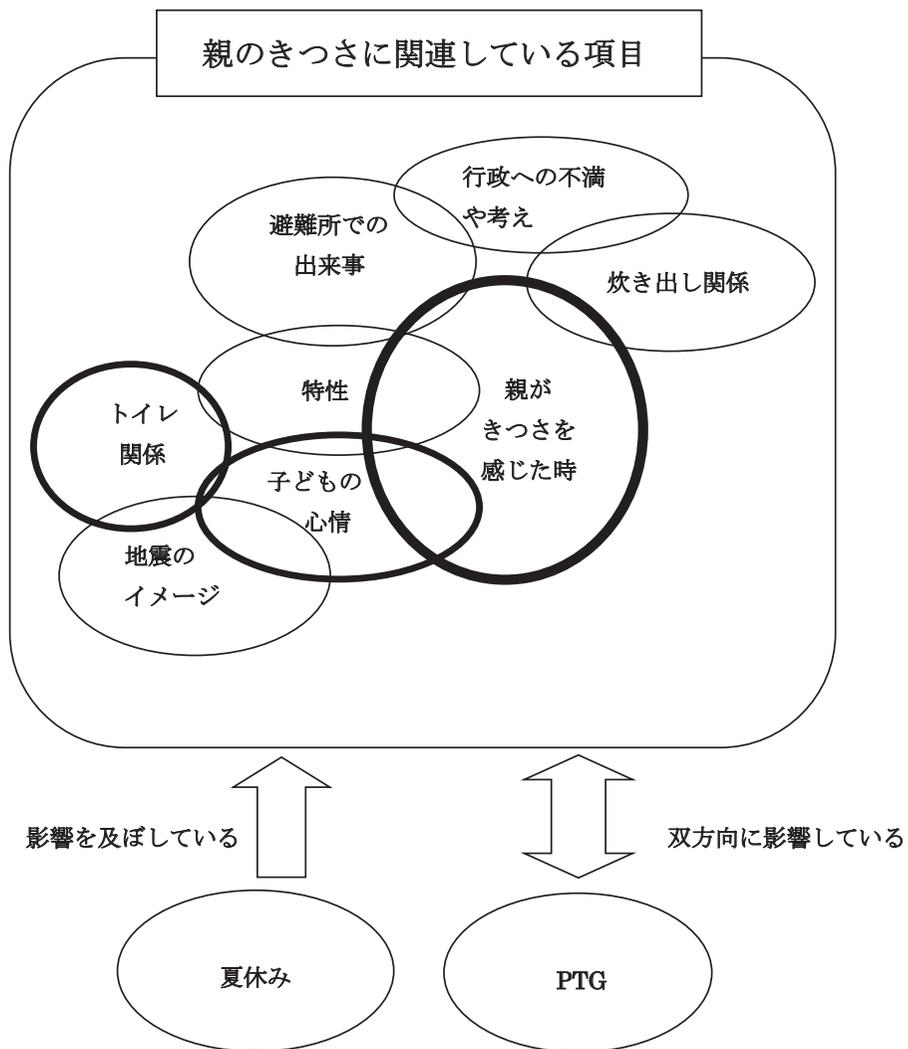


図3. 「休校中における過ごし方」カテゴリー内容の空間配置図

注) 太線：休校中に最も多くみられた項目

領域の広さ：領域が広いほど、項目数量が多いことを示す

中、子どもが避難所への避難を嫌がる為、仕事で父親不在の状況下、自分一人で子どもを見なければならず炊き出しや配給などの支援も上手く受けることが出来なかった。さらに自分たちだけでなく義父母や実母の介護が重なり、障害のある子どもも預け先が無く苦心した様子が記述に表れていた。これに対し疲労度低群の母親の記述からは地震発生から早い時期に非難が出来、震災後の混乱した不自由な時期を熊本で経験していなかった。このように支援を上手く受けられず、母親が自分ひとりで何かを抱えなければならなかった困難さが、疲労度に影響を及ぼしている傾向が考えられる。よって周囲の障がい理解が進むことによる母親への支援の充実が、疲労度を軽減すると考えられる。

PTGに関する考察

本調査では「休校中の過ごし方」に関する記述は1ラベルだけであったが、全体でみると14%にあたるラベルがPTGの記述であった。これに関し、母親の我が子に対する障害認知や障害理解が関係していると著者は考える。山根(2014)は、障害のある子どもを持つ経験に対して何らかの有益性を見出すことは逆境的体験がもたらす心理的適応へのネガティブな影響を緩和しようと述べ、母親が障害のある子どもをもつ経験に対してポジティブな側面を見出すことは、新たな逆境的体験をストレスラーとして認知することを和らげ、逆境的体験による心理的苦痛を和らげることにつながるものと考えられるとしている。我が子の障がいを受け入れ、子どもと共に生きることは決して容易な事では無い。トラウマ的な体験に後に、全員が信念を再構築して何らかの成長を見出すわけではなくPTSD的なネガティブな結果に留まる人もいる。そのようなPTSDに値するような逆境的体験を乗り越えた母親たちだからこそ、今回の震災という新たな逆境的体験の中でも、何か子どもと一緒にできることはないかと状況を前向きにとらえた結果、心理的苦痛を和らげることが出来、PTGと捉えられるポジティブな子どもの側面をより感じ、多数のPTGの記述につながったものと考えられる。

Tedeschi&Calhoun (1996) は前述のPTGに

おける成長の中で人生観における変化に、人生において何が最も重要であるかについての価値観が変わることがあると述べ、以前は何でもないことのように思えたことが、かけがえのないことのように思えるのも、価値観の変化や人生における優先順位の変化の例としている。「休校中の過ごし方」に関する以外の内容には「当たり前が当たり前じゃない時があるのを、理解できてよかった。」「防災意識が芽生えた事。震災の時は怖がり県南の実家に避難したが、落ち着いて家にもどってからは『水がでるー!』と当たりの事をよろこんでいた。」等々、当たりの事が当たり前ではなく本当は恵まれていることに気づき、なかなか日常で伝えるににくい感謝の概念や防災意識の芽生えや育ちなど、地震を体験したことにより子どもの理解が進んだ点があげられた。よってPTGの観点から考えると、これらの記述内容からも本研究における震災後の影響の1つとして、人生観に変化がもたらされ困難な状況下でも前向きに人として成長する親子らの姿が見えてくる。

本研究の問題点と今後の課題

今回の調査は、2016年4月の熊本地震から4ヵ月から半年後にかけて行われたものであり、まだ完全に復興したとは言えない状況下にある。県内には複数の仮設住宅村が造成され、避難生活を余儀なくされている県民の方々も多数おられる。しかし、震災時の混乱した時期は過ぎ、日常生活が戻ってきつつあるようにもみえるが、まだ今後もPTSD等のつらさが表に出てくることも考えられる。

そういった状況から、本調査は地震に関する直接的な表現を避け日常的な子どもたちの生活の様子を尋ねることにより、そこから地震との関連性を探ったものである。しかし、震災には長いスパンでの心のケアが必要と内山(2015)は述べている。本調査でも「地震から半年が経ち、今は震災直後よりはいいけれど、子どもたちの中に恐怖がまだまだあるんだなと感じた。子どもにとって、まだ地震は全然終わっていないと思った」との記述があった。

今回、調査に御協力いただいたお母様方の記述により沢山の子どもたちの地震による不安や恐怖

が明らかになった。そこで、本研究の今後の課題として、この子どもたちの不安や恐怖が今後のケアにより軽減されていく様子や、母親の疲労感が1年後・5年後・10年後と、この先どのように変化していくのか、今後も追研究する必要があると考えられる。

まとめ

先行研究では、阪神・淡路大震災において、行動面で不安を示したり、余震の恐怖を感じ泣き叫んだりする子どもたちの中で、逆に「ケラケラ笑っていた」など状況が理解できない子どももいたという調査記述があり、それは本当に感じていないのか、彼らの不安をおとなが感じ取ることができないのか、どちらであろうかと述べていた(清水, 1998)。しかし、これを障がいの特性から考えると、震災に対する本人の理解度や言語表出の方法の違いから怖さを表現できないだけで、平然と笑っているように見えても本当は何らか普段とは違うものを感じ取っており、その上で行動を示していることに周囲が気づくことができないだけではないだろうか。ケラケラ笑うのは、そのようにしか表現せざるをえなかっただけで、おかしさの笑いではないと考える。またそのように、気持ちと行動が伴わないことが震災時にも起こることは十分に考えられるが、周囲からみれば奇異な言動にもうつりかねない。このような周囲の理解の難しさが、障がいのある子どもの避難所利用のしづらさや、車中泊の多さにつながったのではないだろうか。震災後、特別支援学校に通う児童・生徒を対象にした調査(2016)でも車中泊の多さが指摘されており、調査対象者997人中65%にあたる657人が車中泊を経験していた。この調査を実施した熊本県特別支援学校知的障害教育校PTA 連合会からは、障がいのある子どもが避難所で生活する際には特別な配慮が必要になる場合があり、その為に保護者が遠慮したのではないかとコメントが出されている。また、児童生徒の36%が地震の影響で不眠などの不調を訴え、保護者では570人が不安を訴えていると報じている(熊本日日新聞2016. 12. 14)。さらに同会からは高齢者施設に設けられた為、福祉避難所の利用が少なかった点からも、通い入れた支援学校が福祉

避難所の機能を果たすことで、保護者の連携もこれ不安も軽減されることをあげている。余震の続いた熊本地震以降、鳥取や福岡、またニュージーランドやインドネシアでも立て続けに地震が頻発し、南海トラフについても懸念がなされている。本調査では、発達障がいに対する社会での理解が進むようにと願う母親の切実な思いや、本当に避難に必要なのは、好きな物や食べ慣れた物、普段と同じ生活ができることだと明らかになった。また、震災後の困難さが、母親の疲労度に影響を及ぼしている傾向が考えられた。熊本県特別支援学校知的障害教育校PTA 連合会による調査でも結果としてあらわれたように、障がいのある子どもたちや、その家族にとって通い入れた場所や顔見知りの人たちと過ごせることが、どんなに必要なことであるかがわかる。よって本調査により、地震が子どもたちの心へ与えた影響と、その不安に寄り添い続けた母親自身にも同様にストレスがかかり、それが親のきつき・疲労度にも反映されていたことが明らかになった。周囲の障がい理解が進み母親への支援の充実が拡大し、母親の疲労度が軽減されることが、障がいのある子どもたちとその家族にとり最も必要な支援であると筆者は考える。また、我が子の障がいを受け入れ、乗り越え、子どもと共に生きている母親たちだからこそ、今回の震災という新たな逆境的体験の中でも、何か子どもと一緒にできることはないかと状況を前向きにとらえた結果、心理的苦痛を和らげることが出来、PTGと捉えられるポジティブな子どもの側面をより感じられたことが明らかになった。本研究から、災害に対する避難生活への具体的な支援には、実態、保護者の健康の把握とともに、PTGの観点からも検討を重ねる重要性が示唆された。

本研究は、平成28年度九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科卒業研究論文の発表会において研究成果について報告を行った内容の一部をまとめたものである。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました熊本県内在住の通所施設や支援学級・支援学校に通う児童・生徒、利用者の保護者の皆様に、

大変感謝しております。ご多用な中、誠にありがとうございました。

引用・参考文献

- 内山登紀夫 (2014), 東日本大震災後の福島県において医療支援の対象になった発達障害・知的障害の子どもとその家族の支援ニーズ・支援評価・メンタルヘルスに関する調査: II 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)総括研究報告書, 7-29.
- 内山登紀夫 (2016), 震災後の発達障害の支援ー福島の実験からー:いとしご増刊, ひろっば 7月号, 6.
- 金子健 (2014), 災害時における知的・発達障害者を中心とした障害者の福祉サービス・障害福祉施設等の活用と役割に関する研究: I 厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)平成26年度総括研究報告書, 3-5.
- 川喜多二郎 (1967), 発想法ー造成開発のためにー 中央公論新書
- 川喜多二郎 (1970), 続発想法ーKJ法の展開と応用ー 中央公論新書
- 木村文彦 (2017), 熊本県内19特別支援学校の保護者を対象に行った「平成28年熊本地震におけるアンケート調査」の結果と今後の課題, 熊本県特別支援学校知的障害教育校PTA連合会,
http://www.zenchipren.jp/activty/topics/kumamoto_enquetel7.pdf (2017年11月20日検索)
- 近藤卓 (2011), 震災後の子どもたちとどう向き合うか悠+ (はるかプラス), 28 (5), 70-73.
- 近藤卓 (2012), 心的外傷後成長ートラウマを超えて 株式会社金子書房
- 清水民子 (1998), 震災時の育児支援対策についてー障害児をかかえる家族のばあい (1)ー: 日本保育学会大会研究論文文集, 51, 388-389.
- 清水民子 (2000), 震災時の育児支援対策についてー障害児をかかえる家族のばあい (3)ー: 日本保育学会大会研究論文文集, 53, 664-665.
- 菅原誠 (2011), 災害列島に生きるー「ストレス障害とこころのケア」平凡社
- 染矢俊幸 (2011), 震災後の子どもの心の健康事業報告書:新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンター
- 水野敬 (2016), 小児の疲労, 学習意欲と認知機能の発達:理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター 大阪市立大学大学院医学研究科 疲労医学講座 大阪市立大学健康科学イノベーションセンター, 6.
- 山根隆宏 (2014), benefit findingが発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果:心理学研究, 85, 4, 335-344.
- 八田順子・鈴置央 (2015), PTG (外傷後成長)と楽観性に関する一考察:愛知学院大学心身科学部紀要第11号, 47-56.
- 朝日新聞「発達障害者に支援を 避難生活なじめずパニックも」2016. 4. 21.
- 熊本日日新聞「児童生徒 心身不調36%」2016. 12. 14.
- Tedeschi & Calhoun. 宅香奈子・清水研 (監訳) (1996). 心的外傷後成長ハンドブック 耐え難い体験が人の心にもたらすもの 医学書院

(受稿:11月27日, 受理:1月23日)

Evacuation life difficulties and necessary for developmentally disabled children and their families — Influences of the 2016 Kumamoto Earthquake —

Kumiko NAGASAWA · Miyuki TAKANO

After the 2016 Kumamoto Earthquake, developmentally disabled children such as Autism Spectrum Disorder and their families were forced to live as refugees and stay all night in automobiles. It is difficult to understand the characteristic of developmental disorder for general people by perseverative and stereotyped behavior.

The aim of this study was to investigate about evacuation life difficulty and necessary support, fatigue, PTG(Post-Traumatic Growth) of developmentally disabled children's mothers by interview and questionnaire.

It was found that their mothers were affected by discomfort and fatigue during supporting her children who has psychological impact of the 2016 Kumamoto Earthquake. Otherwise, they could search possible events and find out the aspects of the PTG while receiving their children's disorders.

Key words: The 2016 Kumamoto Earthquake, Autism Spectrum Disorder, Evacuation life Parental fatigue, Post-traumatic Growth